

5907 ped. S. Nagasawa no. 592, Nov. 4, 1905.
 19) *Ribes tricuspe* Nakai, Tyosen Syokubutu 1 : 342 (1914) ; in Bot. Mag. Tokyo 30 : 142 (1916).

Lectotype. Corea (=Korea) media. In silvis montis Kumgansan. T. Uchiyama, Aug. 18, 1902.

20) *Saxifraga octopetala* Nakai in Bot. Mag. Tokyo 32 : 230 (1918).

Lectotype. Corea (=Korea). In rupibus subumbrosis humidis inter Taiheungri et Sanyanubi abunde crescit. T. Nakai no. 6439, July 21, 1917.

21) *Saxifraga watanabei* Yatabe in Bot. Mag. Tokyo 6 : 7 (1892).

Neotype. Japan. Shikoku. Prov. Tosa, Agawagun, Nanokawamura. K. Watanabe, July 8, 1892.

Yatabe published *Saxifraga watanabei* in 10th January, 1892, in which he mentioned the date that Watanabe discovered this on 12th July, 1889. No corresponding specimen is preserved in TI except Watanabe on July 8, 1892. The specimen has a label written by Yatabe's

hand, however, it cannot be regarded as the holotype, because this was collected after the publication.

22) *Tanakaea radicans* Franch. et Sav. var. *matsumurae* Nakai in J. Jap. Bot. 14 : 226 (1938).

Lectotype. Japan. Honshu. Prov. Izu, in monte Amagisan. J. Matsumura, June 9, 1883.

Reference

Ohba H. and Akiyama S. 1990. Catalogue of the type specimens preserved in the herbarium, Department of Botany, the University Museum, the University of Tokyo. Part 4. Saxifragaceae. Univ. Mus. Univ. Tokyo, Material Rep. No. 22, 39 pp., 207 pls.

著者らは、1990年に東京大学に保管されるユキノシタ科のタイプのカタログを作成した（引用文献参照）。その中で20分類群のレクトタイプを選び、2分類群のネオタイプを発表した。ここにその一覧を示した。

（^a東京大学総合研究資料館,
^b東京大学理学部附属植物園）

オドリコソウ属の新帰化植物（高橋秀男）

Hideo TAKAHASHI : *Lamium hybridum* Vill. Newly Naturalized to Japan

1992年4月20日、横浜市金沢区に住む金子紀子さんの案内で、横浜市金沢区のアマナと称名寺のニリンソウやヒロハノハナヤスリなどの自生地を調査することになった。ほかに称名寺にはヒメオドリコソウに似た植物で、和名の不明な種類があるから、それも次いでに調査しようということになった。その副産物が今回報告する新帰化植物である。

ヒメオドリコソウに似た種類は称名寺裏手の山際で、まだソメイヨシノの若齢木の下に、カラスノエンドウ、カキドウシ、ヤエムグラなどに混じって点々と生え、花の最盛期は過ぎていたが、まだ

残り花はあった。花の形はヒメオドリコソウに、色はホトケノザに近いものであったが、葉の形や縁辺が深く裂けることから、明らかに異なった別種で、*Lamium* 属の新帰化植物ではないかと推察された。生育地はほんの一部の林床に限られ、その近くにはヒメオドリコソウも見られたが、混生はしていない。発見者の金子さんが本種に気づいて写真を撮影したのは本年3月11日とのことであるが、昭和55年にこの地を訪れた時には、既にソメイヨシノは植栽されていたと言うから、少なくともそれ以前から生育していたのではないかと鈴木さんは類推されておられた。



Fig. 1. キレハヒメオドリコソウ *Lamium hybridum* Vill.
 a. 花冠 corolla $\times 2.5$. b. 種子 nutlet $\times 6$. c, d. がく calyx $\times 2.7$. e. 花葉 bracts $\times 1.6$. f. 葉 leaf $\times 1.6$.

早速、標本にして持ち帰り同定したところ、ヨーロッパ原産の *Lamium hybridum* Vill. であることが解った。その後に当館の勝山輝男学芸員の照会で下松市万福寺の真崎博氏から、北九州市門司区喜多久で筒井貞雄・真崎博両氏によって畠で採集された同一種の標本が送られてきた。ヒメオドリコソウの陰で、本種の存在は知られていないが、注意すればまだ各地に帰化しているのではないかと思われた。植物誌や図鑑で調べただけでは不安が残ったので、念のため国立科学博物館ハーバリュームの標本も閲覧した。本種を英名で Cut-leaved Red Deadnettle と言うので、和名をキレ

ハヒメオドリコソウと新称する。日本に帰化しているキレハヒメオドリコソウ *Lamium hybridum* Vill. を図示 (Fig. 1) するとともに外部形態を簡単に記し、文末に証拠標本を示す。

形態の記述 越年草、茎の基部は伏臥分枝し、高さ15~25mm、茎葉は1~2対、花期には枯れて殆ど見られない。広卵形で長柄があり、葉身には深い切れ込みがある。花葉は広卵形または三角形状、疎らに毛があり、縁辺は深い切れ込みがあって、鋸歯は鋭形、基部は浅心形または広楔形、柄には挟翼があり茎に沿下する。葉身は長さ8~25mm、幅10~30mm、花葉の柄は長さ2~12mm、花は

花葉の腋に数個束生し、淡紅紫色、がくは筒形、帶紫色の隆起した脈があり、有毛、5裂し、裂片は筒部より少し長く先は鋭く尾状に尖り斜開する。花冠は長さ10~15mm、がくより超出し、外面は微毛がある。種子は長さ2.5×1mm、狹卵形、褐色である。ヨーロッパ産（国立科学博物館収蔵）の一部の標本を見た限りでは、葉の大きさや葉面の毛の量、がく裂片の尖り具合や毛の量などに、変異の幅が大きいようであった。ヒメオドリコソウに似ているが、葉は顯著な長柄があり、葉面は皺がなく、深い切れ込みと尖った鋸歯があり、花葉は赤紫色を帯びない。などで容易に識別できる。

ヨーロッパでは耕作地にやや普通に見られ、イギリスの一部に帰化が知られているが、普通には

なっていないという。

Lamium hybridum Vill., Hist. Pl. Dauph. 1 : 251 (1786)

Voucher specimens. Pref. Kanagawa:Kamakura city, Syoumyoji Temple (H. Takahashi, Apr. 20, 1992, KPM-104697), Pref. Fukuoka : Kita-Kyusyu city, Moji-Ku, Kitaku (S. Tutui & H. Masaki, Apr. 12, 1992. KPM-81282).

終わりに標本の閲覧を許された国立科学博物館の小山博滋博士、生育地をご案内下さった金子紀子さん、北九州市の標本をご提供下さった筒井貞雄氏および真崎博氏に衷心より感謝の意を表する次第である。
（神奈川県立博物館）

ニュース

コマロフ植物研究所の近況

My Recent Visit to Komarov Botanical Institute, St. Petersburg

今年（1992）3月下旬から4月上旬にかけての1週間、旧ソ連邦の旧レニングラード、現セント・ペテルブルクにある、コマロフ植物研究所を訪問した。

同研究所には577万点に達する標本と50万巻以上を収蔵する植物学図書がある（Holmgren et al. 1990）。その標本室は18世紀初頭のピヨートル大帝のコレクションを基礎とするもので、18世紀から19世紀にかけて活躍した、ロシア分類学者の命名にかかわる、ロシア国内はもとより、極東、中央アジアならびにヨーロッパ、地中海、小アジアなどの地域のタイプ標本がほとんどここにあるといえる。私の訪問の理由も同研究所に保管されるベンケイソウ科その他のタイプ標本を研究するためであった。

数年前から訪問を計画していたが、ここ数年来の同国の状況から今日まで見合せてきた。現在ロシア共和国と国名も変わって、国自体が新たなスタートを目指している様子が新聞などのニュースで報じられている。

コマロフ研究所の現状は Grubov と Segienko (1988) やそれを受け Jeffrey (1991) が報告

していた。しかし、正直にいって、百聞は一見にしかずのたとえのように、これらの報告からは同研究所が置かれている状況を理解するのは難しかった。実際にコマロフ研究所に到着するまで、急激な社会改革の中でどういう状態になっているのか気がかりであった。古い建物で補修が必要にもかかわらずその経費がないという危機的状況も報じられていた（Jeffrey 1991）。

研究者の生計も心配であった。外貨との交換レートでも、1990年には1ルーブルが240円であったのが、いまでは1円程度に切り下がった。研究者の月給900から1,000ルーブルは、1,000円程度に過ぎない。

セント・ペテルブルクには、フランクフルトから入った。研究所にはいくつかの建物があるが、高等植物の標本室と図書室がある4階建ての建物が中心になっている（図1, 2）。外壁は黄色に塗られた、その建物の玄関部分には円形のポーチがあり、狭い入口を入れると、受付があり、直進すれば図書室、階段を上がれば標本室に通じる。

1階は図書室、2階以上が標本室となっている。標本室は、シベリア、東アジア、中央アジアなど